

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

わたくしが館長を務めている国文学研究資料館（国文研）は、全国の大学共同利用機関として大規模なデータの集積、整備、発信をしています。また、館内にある数十万点の文芸や歴史史料、あるいは新日本古典籍総合データベースという、高精細画像や書誌データなどを検索するための仕組みを用いて様々な共同研究を行なっています。新型コロナウイルスの影響を受けて四月からは閉鎖していました。

国文研の資料を見ると、過去の書物には、社会が天災に遭遇したときに、その中でお互いにどう守り、コミュニティをどう再生したかという経験が多くの記録されていることに気付かされました。

感染症についての文献も多く残されています。戯作者の式亭三馬には、享和三年（一八〇三）に江戸を襲ったはしかを描いた『麻疹戯言』という小説があります。そこでは「うめきながら、彼らが飲むもの、食べるもの、まるで味がしない。ひとりぼっちで体調が回復するまで一二日間を、指を折って布団の中で待つ以外ないのである」とあります。当時、感染症は二〇〜二五年に一度、人生で二、三回は経験するものでした。感染症の怖さを肌感覚で知っていて、どう体作りをするか、どう衛生状態を保つか。人々は出版物や講談などを通じて情報共有していたのです。文政七年（一八一四）に再流行した際の『麻疹瘡語』には、芝居も（略）営業停止にした江戸の様子や、客が来ず生活できないという人々の嘆きが書かれています。一二〇年前の日本人が驚くほど今と似た状況に直面していたことがわかります。

安政五年（一八五八）のコレラ流行について書かれている『安政午秋／頃痢流行記』には、夫が体調を崩して動けなくなり、無理をした妻が先に亡くなるという話があります。困窮しているところを町内の人が見かねて葬式を出すけれど、妻は残した夫が心配だと亡霊となって夜な夜な出てくるのです。ある種の奇談ですが、人はひとりでは生きていけないということが示唆されています。当時から、感染症は社会全体で乗り越えないといけないという認識でした。2 古典は、共同の経験知の集積であって、その意味では、私たちにとって大事な資源なのです。

また江戸時代の後期、天保年間（一八三一〜四五年）には、大雨による洪水や冷害によって、全国的な飢饉ききんが起きます。いわゆる「天保の大飢饉」ですが、その時に出版された『豊年教種』という書物があります（天保四年（一八三三）刊）。この中に、当時の人々がお互いに助けあう時の心がけについて記述された箇所があります。お米のある人がお米を持ち寄って、ない人に向けての炊き出しをする。困窮している人をどのように助けたらよいか。「飢えたる人に粥かゆを施すには尤も恭しく謹つつしみて与へよ。必ず必ず不遜ぞんざいにして人を恥かづかしむべからず」とあります。その人が困っているのは天災だからであって、自分のせいではない。明日はあなたが困窮するかもしれないのだから、という意味のことが書かれています。

「（△）徳あれば（□）報あり」という言葉があるように、人に施しを与える、誰かを助けたりすることは、周りの評価などを期待しないで、淡々とシェアしなさいという文化が、江戸時代にはあるわけです。それは今でも日本の文化に生きています。自分の名前を出して、これだけのことをしていると主張するような人については、恥かづかしいというか、悪目立ちわるめだしているのではないか、といったプレッシャーがかかると。でも、逆に今はそこは変えていくべきではないかと考えます。

東日本大震災以降、あるいはその少し前から、日本でもボランティアの文化が広がり、シントウしました。実際に多くの若い人たちが、被災地に入り込んで活動されました。現地に赴おもむくことも重要ですが、現地に行けなくてもできることは沢山あります。「このプロジェクトを信じるから自分は寄付したけれども、あなたもどうですか」というように、もっと気軽に、お互いに呼びかけ合えるような状況が作り出せないか。寄付をすることで自分を拡張する。自分を新しく何かにコネクトしていく、そういう意識が大切ではないでしょうか。今回のコロナ禍を通して、新しい感覚を育てることができるよう気がしています。そのための一歩として、3寄付やボランティアは特別なことだし、ちよつと違う、恥かづかしいなと思う気持きもちちを無くしていききたいです。

（略）

大規模災害など非常時のさなかや直後には、一時的に連帯感やコウヨウ感が高まってモラルも向上し、今後の社会をより良くしようという意欲が湧くとされています。新型コロナが終息したとき、私たちは社会に何を残せるでしょうか。パンデミックの状況にある今から手を着けておかないと、喉元を過ぎれば熱さを忘れてしまう。社会のどこをどう良くしたいと感じたのか。不便や不安を極めた状況で、どんな種を見いだして意識や精度を変えていくのか。尊い命が失われ、経済的にも大変な価値が損なわれました。人々の努力に応え、喪失感を埋めるためにも、一つでも二つでも変えるきっかけが生まれればいいと思います。

いま私たちは、4ソーシャル・ディスタンス（社会的距離）を保ちながら連帯感を築くという二律背反に直面しています。子どもに朝食を食べさせ登校させられない一人親世帯、手を挙げて「困った」と言いづらい人たちがいます。普段から声を出すといじめられる、浮いてしまうと感じてくる人たち、社会文化資本にアクセスできないような立場の人は、現在のような状況では、適切なタイミングで声を挙げないと命にかかります。

ひとりになってしまつて話ができる相手がいない状況が、一番の弱者ではないでしょうか。自分が悪いわけではないのです。頑張っているのだけれども、そこはぜひ聞く耳を持つ相手を探して欲しいですし、私たち一人ひとりが、明日は誰かを助けられるかもしれない、そういう自分になりたいたいという気持ちを持つこと、持てる環境をもっと整えていくべきではないでしょうか。

隣で感染が広がれば、自分にとってもリスクです。一緒に立ち向かっていかないと、新型コロナウィルスには勝てない。数日姿を見ない人、一人暮らしのお年寄りなどに声をかけていくことが大切だと思います。

新しい生活様式は、私たちの感性を変え、日々の行動パターンも変えていくでしょう。らせん階段を上るようにして、私たちは色んな角度から新たな景色を迎えるはずです。社会の変化をくみ取り、新たなビジネスを世界に打ち出すチャンスかもしれません。若い人にはアイデアがあるし、わたくしの知る限り、もう考え始めている人もいます。

ソーシャル・ディスタンスは、今はまだ物理的な距離として考えられていますが、社会の中の自分自身の位置づけを知る、自分の居場所から他者との関係を見つめ直すことだとも捉えたい。一人ひとりの資質、意欲によって、自律的に能力を発揮できる社会をいかに整備できるか、そこが問われています。女性の活躍の場を広げる、様々なセクシュアリティのあり方を認め合う、今後が増えると予想される外国人と共存していくなど、課題は山積みしているように見えますが、一方でこの半年間に味わった経験の中には、大きなチャンスが芽を出そうとしているように思います。

5それぞれが、その人の合った適切なソーシャル・ディスタンスを保持しつつ、他者の喜びや痛みをフェイクではなく確かな事実として理解するような連帯感に溢れた社会、そういう未来を是非迎えたいものです。

(ロバート・キャンベル「『ウィズ』から捉える世界」村上陽一郎編

『コロナ後の世界を生きるー私たちの提言』〔岩波書店〕より)